



「共創」を基本方針に掲げる市川市長

市町村
レポート
山形市

「共創」のまちづくり 自立に向かう地域自治

山形市長
市川昭男さん

いでしょか。

そう話すのは市川昭男市長。市川市長は、市民活動の支援を就任1期目から重視している。平成17年に市民活動を総合的に支援する拠点として設置された「山形市市民活動支援センター」に登録するNPO・ボランティア活動団体の数は、平成21年2月末時点で226団体まで増加。「山形市第7次総合計画」において、平成23年までの目標であった220団体をすでに超えている。また、NPOやボランティア活動団体などの市民活動を支援する、「山形市ユニバーシティファンド」への市民企業からの寄附は2千万円を超えた。「市政というのはユニバーサルデザインをいかに具現化するかということだと思えます。三者が共に課題を考え、共有しながら

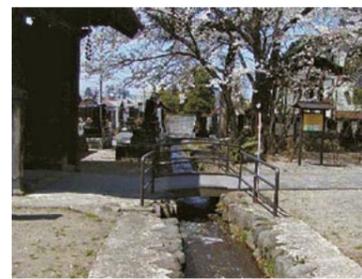
らその解決を探る過程そのものも、各分野のUDを進めていくための基盤になります」。

中心市街地の活性化に向けて

中心市街地の活性化は、全国の自治体が抱える悩みである。山形市の中心市街地である七日町と駅前両ブロックの売り上げは、平成9年にあわせて約700億円。ところが、平成16年には約400億円にまで落ち込んでいる。山形市の中心街には、ルネサンス様式の旧県庁舎、文翔館や最上川舟運文化を今に伝える多数の蔵があり、江戸時代に造られた全長約1.5kmの農業用水堰「山形五堰」が網の目のように流れている。また、周辺部では、NHK大河ドラマ「天地人」で話題の直江

兼続公と山形城主最上義光公が戦った「長谷堂城跡」の整備が行われ、多くの観光客が訪れている。山形市では、こうした既存の歴史的・文化的資産を活かし、中心部の賑わいの創出を図ってきたが、中心市街地活性化のための「切り札」には成り得ていない。

そこで山形市は、認定中心市街地活性化基本計画において、「街なか観光」による賑わいの創出を図るため、「山形らしさ」を前面に打ち出



網の目のように流れている「山形五堰」のひとつ、御殿堰(専称寺)

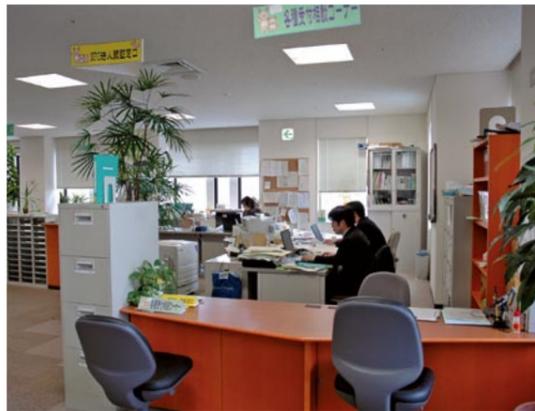
市民活動を支援する

蔵王連峰、月山、朝日といった壮麗な山々と歴史ある町並みとが一体化した美しい景観が自慢の県都山形市。人口25万を有する同市は、まちづくりの基本方針として「共創」という考え方を掲げている。

「市民と事業者、行政の三者が、共にまちを創るという意味です。その三者がそれぞれ適切な力を出し合い、支え合う。あたかも、三辺が同じ面積で形作られる正三角形のような安定した社会が、持続可能なまちづくりを進める条件なのではな



山形城主最上義光公と直江兼続公が戦った「長谷堂城跡」



「市民活動を総合的に支援する拠点」山形市市民活動支援センター



山形らしさを前面に打ち出した「第一小学校旧校舎拠点」(左)と「(仮称)山形まるごと館」として活用予定の蔵(右)



した「七日町拠点」第一小学校旧校舎拠点「(仮称)山形まるごと館」の三つの新名所を築くことを計画した。

「七日町拠点」事業は、行政と民間が中心市街地の活性化という共通の課題の解決をめざし、協力している。計画では、市が歴史・文化的資産である山形五堰のひとつ「御殿堰」を石積み水路として再整備し、七日町御殿堰開発株式会社、既存の蔵の改修と町屋風の2階建ての商業施設



ルネサンス様式の旧県庁舎「文翔館」

子育て環境の整備

市では総合的な施策を行えるように、健康福祉部内にあった「子育て推進課」を平成21年4月より「子育て推進部」に昇格させた。同じく4月よりスタートする「子ども医療制度」は対象を就学前から小学1年生までに拡大し、保護者の医療費の負担軽減を図った。また3月からスタートしている妊婦健診の助成は、従来の5回から14回に拡充した。

「子育て環境の整備は、山形市が重点的に取り組んでいる課題の一つ。若いお父さん、お母さんたちにとって、子供の医療費は結構大きな負担になります。次代を担う子供たちのために、行政としても最大限支援していきたいと思えます」と市川市長は力強く語った。



祖継学と鶴岡市の気風について語る富塚陽一市長

市町村レポート 鶴岡市

鶴岡市長 富塚陽一さん

文化でつむぐまぢづくり 個性豊かな文化を牽引力に

おぎゅうそらい 荻生祖継の伝統が生み出した気風

平成17年10月1日に6市町村が合併して発足した鶴岡市。総面積1,331.49km²は東北一、全国市町村の中でも10番目に大きな都市となった。「住民の皆様のご理解ご協力により、大きな問題はな

く移行できたと思っています。もともとここは、ひとつの気持ちで生きてきた地域ですからね。旧鶴岡市で4期市長を務め、合併後も市長を務める富塚陽一市長は話す。

業が盛んで、江戸時代には庄内藩の城下町として栄えた。自由へのびのびと、個性を伸ばすことが伝統的な気風です。それは致道館の教えであった荻生祖継の祖継学が土壌になっています。

都市像として、「人 くらし 自然 みんないいき 心やすらぐ文化をつむぐ悠久のまち 鶴岡」を掲げた。鶴岡ならではの文化を守り育てることが、市政の基軸となる重要な位置を占める。

文化を継承し新しい文化へ

致道館とは、庄内藩の優れた人材の育成を目的に、文化2年(1805)酒井家九代目藩主・忠徳公が創設した藩校だ。その教学となったのが祖継学で、各自の天性に応じ長所を伸ばすことが重視された。そんな歴史を背景に、市民は学問や芸術に勤しみ、多様で貴重な伝統文化や生活文化を産み育ててきた。

同市の基礎的な産業となる農林水産業においても、先人の努力や研鑽により品種の改良・開発が盛んに行われてきた。「在来作物の種類が非常に豊富で、とてもおもしろい作物が生み出されています。それは農業者の知恵と工夫のたまもの。鶴岡農業は、知識産業で、農業者は知識職業人であるのです。」

合併後約3年が経過し、新・鶴岡市では、これからのまちづくりの中長期的な指針、鶴岡市総合計画を発表した。めざす

在来作物とは、その土地で長年栽培されてきた文化を詳しく取り上げていく。連載20回を迎えたところに二冊の本としてまとめる予定と富塚市長は話す。「鶴岡市の文化を若者たちにしっかりと伝えていきたい。そして、定着してもらいたいし、楽しんで、喜んで引き継いでほしいと思っています。伝統的なものを持ち続けていつたときに、そこからまた先端的なものが生まれてくると思います。」

学術文化を振興する 研究教育活動を支援

高等教育研究機関の集積も、文化・産業の発展基盤として位置づける。戦後開設の山形大学農学部、国立鶴岡工業高等学校、専門学校、平成13年に慶應義塾大学先端生命科学研究所、平成17年に東北公益文科大学大学院が設置された。現在4つの高等教育機関が研究教育活動を展開、同市でも積極的な支援に努めている。

先端生命科学研究所では、人の細胞に関する超高度な研究を深め、開所以来、世界的にも注目される画期的な研究成果を次々と挙げていく。富塚市長は「研究所には、人間の生命だけでなく、植物の生命にまで領域を広げてもらおうと促しています。鶴岡の自然のポテンシャルは非常に豊かです。まだまだ発見していないものがあるだろうし、それを見出したときにまた新しいものが生み出されるでしょう。」



庄内藩校致道館



東北公益文科大学大学院と慶應義塾大学先端生命科学研究所



500年以上の歴史をもつ民俗芸能「黒川能」



「ラムサール条約」湿地として認定された大山上池(下)・下池(上)



在来作物「だだちゃ豆」

れ、親しまれてきた野菜、果樹、穀類などの作物のことで、山形在来作物研究会の調査では、鶴岡市には50品目が存在する(山形県全体で133品目)。全国区となった「だだちゃ豆」、小型丸なす「民田ナス」、ワインの原料となる「ヤマブドウ」など個性あふれる作物がそろそろ。市では生産・加工・販売を促し、地域文化としての顔としてその価値を発信している。

このほか、500年以上の歴史をもつ民俗芸能「黒川能」(平成20年にはパリで公演)、日本で唯一その全工程が集積する「絹織物」、樹皮からとれる靴皮繊維で織り上げる「しな織り」など、伝統的文化資源は枚挙にいとまがない。市の広報紙では「文化の継承」というテーマで、毎年こ

さらに豊かで楽しい社会となる可能性があるあると思っています」と話す。

合併により森林が7割を占めるようになった同市は、その豊かな自然も貴重な資源であり守るべき文化。出羽三山は世界遺産登録をめざし、平成20年には大山上池・下池が国際的に重要な湿地を保全する「ラムサール条約」湿地として認定されている。

暮らしが均質化し、まちの個性が見えづらくなっていく中、豊かな文化を市政のけん引力とする同市。市長から多く聞かれたのは「のびのびと」「楽しんで」という言葉。市民をおだやかに包むような姿勢に、この地の「個」を重視する「伝統が息づいている。」



樹皮からとれる靴皮繊維で織り上げる「しな織り」



自然や人間関係の豊かさを語る原田俊二川西町長

市町村
レポート

川西町

桃源郷の内発型まちおこし 地方が持つ豊かさを見直す

川西町長
原田俊二さん

アジアのアルカディア

維新後まもない明治11年、英国人の女性旅行家イザベラ・バードが日本を訪れ、西洋人未踏の地であった東北地方や北海道を旅した。その旅のおり、置賜盆地のほぼ中央部に位置する当時の川西町を訪れた彼女は、その美しい田園風景を「アジアのアルカディア（桃源郷）である」と、日本での旅行記「Unbeaten Tracks in Japan」に記している。後に彼女の日本旅行記は、川西町出身の高梨健吉さんの翻訳によって『日本奥地紀行』として刊行された。

原田俊二町長は「自然の豊かさ、食糧の豊かさ、人間関係の豊かさ、さらには豊かな歴史や文化。お金では測れない地方が

持っている豊かさが見直されてもいいのではないのでしょうか」と語る。原田町長は都立高校の教員を務めていたが、「高畠町有機農業研究会」のリーダーとして活躍し、また詩人・評論家でもある星寛治さん（本誌28号掲載）の応援もあり、自分の暮らしをつくる原点である農業の担い手として帰郷した。

四季の変化がはっきりした盆地性気候や山々から流れ出す、雪解けのミネラル分を含んだ伏流水などに象徴される「自然の豊かさ」が、県内屈指の米どころ、また米沢牛や紅大豆の産地として川西町の「食糧の豊かさ」を支えている。米沢牛に比べ、紅大豆の知名度はまだ低い。紅大豆は全国でも希少な「赤豆」であり、「煮豆に

するとおいしい」と地元のおばあちゃんたちが守ってきたそう。平成18年には、「作るだけの農業」からの脱却を柱にした「川西町紅大豆生産研究会」が発足。紅大豆を使った商品開発は、米沢牛を使った商品開発ともども、今後の発展が期待されている。

川西町には、県内最大の500名の知的障害のある人たちが入所できる「山形県総合コロニー希望ヶ丘」と9つのグループホームがある。昭和48年当時、県から総合コロニー建設の方針が出されたとき、川西町では商工会の人たちが中心となって施設の誘致運動を行い開設された。以来、夏まつり、運動会、文化祭など入所者と地域の人々との交流が積極的に行われ

ている。

「まちづくりは出会いとふれあいを大事にしないとイケない。川西町では障害がある人も地域のコミュニティの中に溶け込んでいて、町中を歩いていても何も違和感がありません。他所ではグループホームを開設するときに反対運動が起きたりしますが、川西町ではグループホームを閉鎖するとなると、自治会から反対の声が上がります」と原田町長は、同町が醸成してきた「人間関係の豊かさ」を誇る。

地域資源の再評価

同町にはユニークな資源が豊富。川西町フレンドリープラザは県内屈指の文化

施設だ。作家・劇作家の井上ひさしさん寄贈の蔵書約13万冊が収蔵された「運筆堂文庫」を核に、客席数717の本格的な演劇ホールと町立図書館が一体となった複合施設である。井上さんは、川西町で生まれ多感な幼少時代を過ごした。書籍には作家がつけた付箋やメモがそのまま残り、ファンには魅力いっぱい。

昭和35年に開園した「川西ダリア園」には毎年夏に650種類、5万本もの大輪が開花する。日本一の規模で、メキシコや東京都町田市との交流が盛んだ。「川西町では紅大豆のように、もともと

あった資源を発掘したり、それを磨きあげる内発型のまちおこしに力を入れてきました。企業誘致など外部から応援してもらって活性化もありますが、自前で核となるものをつくることも大切です。そうでないと、主体性がどちらにあるのか見えにくくなってしまいます。

イザベラ・バードが川西町を訪れてから約130年、川西町の現在の人口はおよそ1万8千人。高齢化率は29%を超え、理想郷と称された川西町にも自治体共通の悩みである高齢化の波が押し寄せている。

「まだまだ65歳は現役です。80歳でも元気に活躍されています。その方々の10年、20年後の未来を考えたまちづくりをどう進めていくのが課題です」。

平成21年4月より、川西町では公民館

を「地区交流センター」へ移行する。従来の公民館の役割に限定されず、人づくり、地域づくりに加え、地域資源を活用した産業振興なども行い、今後懸念される高齢化や人口減少に伴うコミュニティの希薄化を解消する計画だ。



美しい田園風景



グループホーム「希望が丘東おき第1ホーム」



食用菊を使った食事の準備をする入居者たち



5万本のダリアが咲く「川西ダリア園」



有限会社肉の斎藤の斎藤美和子さん。米沢牛おむすび「牛腸」で平成20年度「やまがたふるさと食品コンクール」最優秀賞を受賞。全国大会で農林水産大臣賞に輝く



川西町フレンドリープラザとプラザ内に設けられた「運筆堂文庫」

